

# まが たま 勾玉

■ 出土地：首里城跡 御内原北地区、正殿跡

これらの勾玉は、1つは首里城の御内原北地区、もう2つは正殿跡から出土しました。正殿の東側一帯は『御内原』と呼ばれ、国王とその親族、そこに仕える女官が生活する男子禁制の場でした。

勾玉とは、全体が逆「C」の形をなし、丸く膨らんだ頭部に孔をあけた製品を指します。材質には、ヒスイ・碧玉・メノウ・蛇紋岩・滑石・ガラスなどがあります。日本本土では縄文時代に登場し、弥生時代から古墳時代に隆盛を迎えたとされ、一般的には装身具と考えられています。

沖縄における勾玉は、12世紀頃から現われ、グスク時代から近世に位置づけられるグスクや集落遺跡及び祭祀遺跡などから出土しています。つまり、日本本土と沖縄での出土状況には相当の時間差があることがわかります。

沖縄では、勾玉は琉球王国神女であるノロの首飾りなどに使用されていることから、単に装飾品としてだけでなく、祭祀に関係するアイテムの可能性も考えられます。